

とじょがんのオススメ

ここで読んで
いくかい? ▼



「鈴の送り神修行ダイアリー」

山下 雅洋 / 著 酒井 以 / 絵

岩崎書店 / 刊

(二〇一三年)



夏休み、死神修行はじめます！

テストの結果でクラスの笑いものにされてしまい、不登校になっていた中学二年生の藤崎鈴は、夏の間だけおじいちゃんに住む笹山村で暮らすことになった。しかし、村で宿題のネタを探る途中、鈴は足を滑らせて池に落ちてしまう。溺れてしまったはずの鈴が目を見ますと、そこは「あの世」と「この世」の境、「あわいの世界」だった。

「あわいの世界」で出会った謎の少女・八重、「死神」、もとい「送り神」のおじいさん・左衛門に教えられ、人の魂を「あの世」へ送る「送り神」としての修行を積むうちに、鈴は生きることや人のいのちについて見つめなおしていく。そして、大切な人を救うため、鈴は大きな決断を下す…。

人の死がテーマになっている物語なのに、読んでみると心が温かくなります。どこか懐かしいような、長くて短い不思議な夏休みを、みなさんも体験してみませんか？



「寝ても覚めてもアザラシ救助隊」

岡崎 雅子 / 著

実業之日本社 / 刊

(二〇一二年)



アザラシと聞くと、みなさんはどのような動物を思い浮かべるでしょうか。茶色くて、ソウのよつに大きく、立派な牙をもつ動物？うーん、それはおそらくセイウチですね。鼻先で器用にボールを回す、水族館の人気者？惜しい！そっちはきつとアシカでしょう。雪のように真っ白で、揚げる前のエビフライのような動物を思いうかべた方はおそらく正解です。赤ちゃんの短い期間だけに見られる「ホワイトコート」という姿ですが、その愛くるしさからアザラシの代名詞と言えるほどに有名ですね。大阪の海遊館や埼玉の東武動物公園にいるアザラシは一時期話題になっていたので、見覚えのある方もいるかもしれません。

さて、野生のアザラシが数多く生息する北海道沿岸部では、アザラシは古くから人々の生活に深く関わってきました。「とっから」はアイヌ語を語源とする北海道の方言でアザラシを意味しますが、北海道のオホーツク海側に位置する紋別市には、そんな「とっから」の名を冠する、ある施設があります。

それが、本書の主な舞台となる「オホーツクとっからセンター」です。

オホーツクとっからセンターは、けがなどの原因で自然の中では生きていけなくなってしまった野生のアザラシたちを保護・訓練し、再び自然に帰すことを目的として活動する、日本唯一のアザラシ保護施設です。センターでは、ひとたび要請があれば、車を何時間もかっぱしてアザラシのもとにかけつけ、保護の必要があれば連れて帰って治療します。保護されたアザラシたちは、元氣になれば海にリリースされますが、けがや病気の後遺症などで自然界での生存が厳しいとなれば、センター内で終生飼養(死ぬまで適切に飼うこと)されます。

本書では、イヌもネコも苦手だったという筆者が、いかにしてアザラシの保護に携わるようになったのかに始まり、センターでのアザラシの保護活動とリリース、北海道のアザラシをとりまく現状、そしてアザラシの生と死に直面する筆者とセンターの職員たちの姿を、アザラシ愛にあふれる語り口で描きます。将来は環境や生き物に関する仕事に就きたいと考えている人、進路やキャリアに悩んでいる人、または単にアザラシや動物が好きな人も、生き物について考えるきっかけにいかがでしょうか。



いろは新聞編集
スタッフを募集して
います！

好きな本の紹介、イラストの作成など、自分の得意な分野で活動できます。

対象は、市内在住・在学の中・高校生世代です。興味のある方は、図書館ホームページの募集ページをご覧ください。中央図書館臨時窓口までご連絡ください！

スタッフ募集ページ



(https://www.lib.fussa.tokyo.jp/young/new_topic/2023/05/post-45.html)



活動の様子 (2009年)